



の中の

子ども  
たち

## 第7回「ラビット・ホール」

—子どもが死ぬということ—

川崎 二三彦

### 無理心中

他人には「さもありがたみ」と思われるようなことでも、当事者にとっては想定外としか受けとめられないことは珍しくない。多額の借金をかかえ、夫婦げんかではモノを投げつける行為もあったという夫は、自分では考えてもいなかった離婚を妻から突きつけられて驚愕する。

とはいえ妻の意思は固く、小学生の一人娘とはいつでも会えるという条件で離婚に応じ、一人暮らしを始めたのであった。ところが、離婚後たった1週間で事件が起きる。元妻の住む家から子どもを連れ出し、おもちゃを買ってやったり銭湯に入るなどした後、自宅に連れ帰って一晩過ごした翌朝のことだ。

「○恵は私の子です」「別れて暮らすなんて無理」「あの世で一緒に暮らします」

こんな遺書を書いた後、隣ですやすや寝入っている子どもの首を絞めて殺害し、自らはリストカットしたものの死にきれず、娘殺害の罪で逮捕されたのであった。

私が見たのは、大柄な体を縮こませ、肩を落として座る男の姿。今は被告人となって公判廷に登場したのである。

「活発で元気な子だった。なぜ娘にそんなことができるのか。憎くてたまらない。娘の味わった苦しみを自分も味わってからこの世を去ってもらいたい」

元妻であり、母である女性の供述調書が読み上げられ、被告人は、嗚咽しながら次のように話すしかないのであった。

「私の身勝手な行動により、未来ある大切な命を奪ってしまいました。一生かかってもこの罪はつぐなえませ

ん。申し訳ございませんでした」

### どこにでもあり得るからこそ

こんな裁判を傍聴した後で観たのが「ラビット・ホール」である。

やはり子どものいのちが奪われ、そのことをめぐる父母の、夫婦の葛藤がテーマの映画。ただし、こちらは交通事故による死である。だったら私がついさっきまで目の当たりにしていた無理心中未遂事件よりも、失礼ながらありふれている。映画にするなら、むしろ心中事件のほうが起伏あるストーリーになるぞ、などと漠然と考えながら観ていたのだが……。

\*

本作は、同名の戯曲が下地になっているという。死亡した子どもの母親ベッカ役で主演したニコール・キッドマンがその芝居に感動し、自らの製作会社で映画化を実現させたのだが、見終わってなるほどと思った。

ことこの映画に関する限り、何か特別な事情で子どもが亡くなってはいけないのである。むろん、家族の誰かが責任を負うような背景があるなんてことは、展開上許されない。なぜといって、誰もが経験する可能性のある不幸だからこそ、観る者にとっては他人事でなくなるからである。そして、一つの事実を受けとめる、その受けとめ方



が人によってさまざまであることが、印象的に表現される映画だからである。

### 喪失体験とは

それまで育ててきた子どもを、突然のアクシデントで奪われたら、人はどうするのか。いつまでも忘れまいとして、子どもが使っていた部屋の様子を何一つ変えず、そのままの状態でおきたくなるだろうか。あるいは、悲しみを振り切って前に進むため、全てを忘れ去って再出発をはかろうとするだろうか。

映画では、夫婦の一人が子どものさまざまな持ち物を処分しようとし、一人がそれを激しく咎める。同じ境遇の人たちが集まって話し合うグループに一人は参加し続け、一人は拒絶する。子どもに対する思いはいずれ劣らぬのだけれど、こうした食い違いを通じて、夫婦は喪失感を通奏低音にしていがい合い、傷つけ合う。

ところで私は、いずれか一方に感情移入したり荷担するのでなく、彼ら二人の葛藤を、それぞれさもありませんと頷きながら観ていたのであった。

ということは……

と考えると思い当たったことがある。もしかして彼らは、一人の人間の中にあるアンビバレントな二つの、若しくは矛盾する種々の感情を形象化するために生み出された人格であって、実は一人の人間の中に彼ら二人ともが存在しているのではあるまいか、と。

原作の戯曲がピュリッツァー賞やトニー賞を受賞したというのは、現実生活ならば、おそらくは日常生活の雑事などに追われてふり返ることすらままならない私たちの感情の機微を、夫婦二人の登場人物に托し、気持ちの奥底に潜む襞に分け入るようにして示し得たからであろう。それを見事に映画化したからこそ、本作は印象深いのである。

### 小石

映画の最後近く、享年 30 歳の息子を亡くしているベッカの母が、「いずれ悲しみは消えるのだろうか」という彼女の問いに答えて口を開く。

「この 11 年間、悲しみはずっと消えない。でも変化するわ」

「何というのか、重さが変わるの。のしかかっていた重い大きな石が、ポケットの小石に変わる」

こう聞かされて、ベッカの中の何かが動くのだけれど、実は私自身も、目の前でその小石を見たことがある。

父が亡くなった時のことだ。医師が声を落として「ご臨終です」と告げた途端、真っ先に遺体に取りすがったのは母であった。涙を押さえながら「お父さん、アキラのところへ行って私たちを守って下さいよ」と、感極まった調子で話しかけるのだ。アキラとは、父の死よりも約 40 年近くも前、私が生まれる前に事故で亡くなった私の兄に当る人物である。したがって私にとっては遠い過去の現実感なき存在に過ぎないし、両親から彼のことを聞いたこともほとんどない。だから父の死の瞬間、彼の人の名が母の口をついて出たことは、意外でもあり驚きでもあった。だが母にしてみれば、40 年間という期間、変化はしてもやはり常にポケットに入っていた小石だったのである。

人の死、わが子の死とは、このようなものなのであろう。

鑑賞データ

2011/11/16 TOHO シネマズ シャンテ

\* 公式 HP <http://www.rabbit-hole.jp/>

\* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/15765>

#### <これまでの連載>

- 第 1 回 「プレシャス」 <http://bit.ly/9qGWXm>
- 第 2 回 「クロッシング」 <http://bit.ly/rYwUnO>
- 第 3 回 「冬の小鳥」 <http://bit.ly/eGJId9>
- 第 4 回 「その街のこども (劇場版)」  
<http://bit.ly/hzhB9t>
- 第 5 回 「八日目の蟬」 <http://bit.ly/keXFwL>
- 第 6 回 「いのちの子ども」 <http://bit.ly/pm8V0p>